

# 「聖なる煙草」におけるカルメット

—— メルヴィルの辿り着いた異教的境地 ——

大 島 由 起 子\*

## 序—「聖なる煙草」("Herba Santa") に関する批評

ハーマン・メルヴィル (1819-91) の宗教観についての議論といえば、Lawrence Thompson 著の *Melville's Quarrel with God* や寺田建比古の『神の沈黙』といった批評書に代表されるように、キリスト教の神を信じることができない作者の苦悩が強調されるきらいがあった。あるいは、それとは対照的に、Walter Donald Kring 著の *Herman Melville's Religious Journey* のように、晩年のメルヴィルが、彼が暮らしていたニューヨーク市の All Souls Church というユニタリアン派の教会で正式に教会員になったことから、メルヴィルが死の 5～6 年前になり、遂にキリスト教を受容したとする解釈もあった。著者の考えに最も近い批評書は、William Bysshe Stein 著の *The Poetry of Melville's Late Years* である。この本のなかで Stein は、晩年のメルヴィルが、古代ディオニュソス信仰を信奉していたと主張している。

しかしながら、こうしたいずれの研究も、メルヴィルの長年にわたる宗教観を探るにあたって役立つとはいえ、メルヴィルのコスモポリタンの様相は捉えきれていないと思えてならない。齢 70 近くになったメルヴィルが辿り着き、それなりの心の平安を得た境地は、そうした具体的な文化や宗教、ましてや宗

---

\* 福岡大学人文学部教授

派に特定できるものではなく、彼独特のものであったと筆者は考える。

本研究は、メルヴィルの最晩年に出版された詩集『ティモレオン』(*Timoleon*, Etc. 1891) 所収の1篇の詩「聖なる煙草」("Herba Santa")にメルヴィルの宗教観を探る。先行批評を踏まえた上で、メルヴィルが諸文化混交的で、世界宗教めいたものを信奉するに至った過程を辿りたい。実に、この一作をもって、相当程度にまでメルヴィルの晩年そして越し方を窺い知ることができるものである。

『ティモレオン』は私家版として25部のみ作られた。この詩集は二部構成からなっている。その後半部は「うんと昔の旅の思い出」("Fruit of Travel Long Ago")と題されて、1856-57年のメルヴィルの地中海ならびに聖地への旅行体験を基にしたまとまりがあるセクションである。本稿で焦点を当てる「聖なる煙草」は詩集の前半部の末尾を飾る。内容的にいても、『ティモレオン』の後半部では詩人がピラミッドの中の部屋を謳うが、その空間には無しかないという虚無的な結末である。

しかしながら、Elizabeth Renker もメルヴィルの詩が比較的無視されてきたことは解せないという。(Renker 482) Hershel Parker は、メルヴィルの詩の研究がおろそかになってきた理由として、メルヴィルがいかに生涯にわたって詩を読み、かつ、一般に思われているより早い段階から本格的に詩作を手がけていたことを強調し、この点が従来ないがしろにされてきたことを是正している。<sup>1</sup>

従来、「聖なる煙草」という詩は、さして注目されてこなかった。本作品に関する先行批評については、Edgar A. Dryden の手際のよい概要がある。(Dryden 219-20)。それによれば、William Bysshe Stein は「聖体拝領というばかげた歴史的論争を」皮肉った作品である。(Stein 82) William H. Shurr は、この詩集で呈示された問題を解決する「一見、実に浅薄な作品のようで」、その実、「本詩ならび類する詩群は、メルヴィルが大問題にたいする探求を諦め

たようであることは、一時的な戦略にすぎない」(Shurr 168) という。William B. Dillingham は「普遍的な問題に安易な答えを出すことに対する楽しい揶揄」(Dillingham 119) であるとしている。Dryden 自身は、煙草はとりわけ 19 世紀後半のニューヨーク市の男性の集まりと関連深いと指摘して、メルヴィルが生前、活字にしないで残した草稿「旅籠にて」("At the Hostelry") でスケッチしたようなバーガンディー・クラブ (Burgundy Club) という男性の集まりが参考になるという。そして詩神は具体的には Marquis de Grandvin のことであるという。(Dryden 184) Dryden はまた、過去の宗教が機能しなくなり、ミューズもいなくなった近代にあっては、新世界の煙草がキリスト教に取って代わるのだという。こうした批評よりも、筆者は、Robert L. Gale が記した『ハーマン・メルヴィル事典』の数行の説明によほど重要性を見る。Gale によれば、「この詩はインディアンの和睦のパイプを明示的に賞賛し、キリスト教徒の胸の内にひそんでいる偽善を暗に批判している」(ゲイル 244)。

しかしいずれにせよ、「聖なる煙草」は Dryden や Gale がいうようなキリスト教にたいする揶揄に止まるものではなく、もっと多くのことを主張していると思う。それを探るのが本稿の目的である。

## 1. 「聖なる煙草」読解

本稿では「聖なる煙草」をゆっくりと解釈してゆき、メルヴィルのコスモポリタンの諸相を検証したい。

まず、本詩のタイトルであるが、当初、西洋ではタバコには奇跡的な治癒力があると考えられたため、タバコは向精神性の聖なる癒しの薬草として、"herba panacea"、"herba santa"、"sana sancta Indorum" と呼ばれた。

「聖なる煙草」でメルヴィルは、カムレットという先住民独特のパイプと関連させて、聖なる煙草という概念を使い、煙草を讃えることで、間接的に西洋の限界を揶揄している。本詩の謳い手はジャスミン茶を嗜みもする。"herba

santa"なる表現は、北米先住民にとどまらず両アメリカ大陸を感じさせる拡がりを持つため、本詩のタイトルは謳い手の「魂の中にある東洋の小部屋」も含む環太平洋的なタイトルとなっている。煙草はマヤ文明にも儀式として根づいていた。クリストファー・コロンブスが西インド諸島から喫煙という風習を持ち帰り、ポルトガルも新大陸に足跡を記し、ヨーロッパ人が喫煙のことを知るようになった。そして煙草は16世紀半ばから後半にかけて、他のヨーロッパ各国へ伝えられた。

「聖なる煙草」ではカルメットが出てくるが、それについては、あらかじめ述べておく必要がある（Kelly 64, 67, 71, 78. Hall 21）。例えば James Axtell は次のように概括している。

Throughout much of eastern America in the seventeenth and eighteenth centuries, the major vehicle of peaceful alliance was the calumet, a four-foot-long wood and stone pipe richly decorated with paint and a fan of long feathers. (Axtell 27)

カルメットは、カトリナイトという赤褐色の石で作られ、長い柄を持つパイプで、柄は羽根や毛などで美しく飾られることが多く、平和のシンボルとされていた。（上野 19）カムレットは、「北米、特にロッキー山脈東側の大高原地帯の先住民の間で広く用いられていた儀式用のパイプ「カルメット」（あるいは「平和のパイプ」）も、タバコが持っている霊的な力への宗教的な崇敬の念に基づくものといえよう。」（上野 19）

パイプの回し飲み典型的に見られるように、あらゆる取り決めや約束事はタバコが存在によって確認され、発効したのである。アメリカ先住民社会、とりわけ北米東部では、このようなタバコの機能はカルメット（平和

のパイプ)として知られる込み入った儀式へと発展した。カルメットは非常に重要な公的場面におけるパイプ使用の一例である。/ カルメットの儀式は、主として政治的義務や品物の交換から成り立っている。儀式にはしばしば歌や踊りが供されたが、儀式の核は儀礼的喫煙、すなわち参加者によって共有されるカルメットである。人類学者や歴史学者は長い間この儀式に魅了され、起源や分布を探るべく多くの試みを行った。その結果、カルメットがタバコの威力を示す唯一の方法ではなく、北米東部一帯に広まった喫煙を中心とする儀礼の複合体の一部であるという点で、研究者の多くは合意を見ている。最近の研究によれば、イロコイ族のイーグルダンスや平原インディアンの医薬も、この複合体に含まれる。それぞれの儀式は目的は異なっているものの、タバコの存在という点ですべて共通しており、パイプの使用も広範囲に認められる。(グッドマン 50)

さて、タイトルに手間取ってしまったが、以下、詩のセクションごとに読解を試みたい。本詩には既訳はないため、いずれのセクションでも、まず詩行の訳出を提示した。

### 第一セクション

長きにわたる戦争終わり、解き放たれ

小春日和には

平和を誓うオリーブの杖よりも

もうもうの<聖なる煙草>が

大切さ。

警戒心を解かず気を吐いて、

心の痛みも鎮めるとうけあってくれる。

(Melville 325)

「小春日和」という訳になる "In autumn's Indian air" は、インディアンサマーともいわれる。詩行は直訳すれば「秋のインディアン的気分」である。小春日和は「穏やかな時」だとか「人生の終盤や活動が終わりに近づいているときの穏やかで有意義な時」をいう。最晩年のメルヴィルの満ち足りた気分を表すととってよいかもしれない。<sup>2</sup> インディアンサマーは聖マルタンの日である 11 月 11 日でもあり、本詩第四連で言及される聖人マルタンとも関連してゆく。

この第一連からすでに、西洋と先住民を対比させていることは特筆に値する。諷い手は、平和を誓うオリーブの杖よりも何よりも、聖なるパイプの癒しが大切だと主張している。西洋では、平和の象徴として有名なのはオリーブの枝をくわえた鳩であるが、これは、旧約聖書の創世記 8 章 8～11 節の「ノアの箱舟」に由来している。ようやく大雨が止み、箱舟がアララテ山の頂上に留まった時、ノアは水の引き具合を調べるために鳩を放ったが、鳩はすぐに戻った。7 日後に再び鳩を放すとオリーブの若枝を加えて戻って来たので、神にはノアたちが箱舟から降りることを許されたということがわかったという。周知のくだりである。なお、古代ギリシア・ローマ時代から鳩とオリーブは無垢と平和の象徴とされてきた。対して、北米にはオリーブの木は白人到来まではなかったので、オリーブは先住民とは無縁である。

## 第二セクション

現世を生きるわれらのために

<愛>が聖餐にお招き下さったというのに、

<愛>こそが掟だなどと

大上段にかざして、誰論ず。

愛想よしの葡萄酒をいただきながら論争するとは、愚の骨頂！

されどまた、妙ちきりんな争いおっ始める。

ささやかさにやる方がうまくいくのに、

穏やかなりしく葉草よ、感覚にとりいる

そなたの人懐こさにこそ効能あり

アダムの子孫たちときたら苛立ってばかり

でも友愛になら心揺さぶられる！

そしてそなたの祭壇に自分たちの旗など投げ捨てる、

そなたは世のため人のため喜んで炉辺となってくれよう。

(325)

この第一連にはワインが出てくる。<sup>3</sup> <愛>でワインの夕べという表現は、キリストからの愛に溢れる贈物というように読める。しかし人々は、キリストから美味しいワインをもてなされたことに感謝すべき立場にありながら、肝心の愛のメッセージはどこ吹く風で、宴の場で、またしても「妙ちきりんな争い」("strange feuds") を始めてしまう。このように、ここでは、どうしようもない人間の救いのなさというか救済に値しない様が描かれている。

上記第二連では、煙草がいかに聖なるものであるかが説明される。たしかに煙草は嗅覚、味覚、(もしかして視覚も)を含む人間の諸感覚に訴えるが、謳い手は、煙草は、キリスト教会のように<愛>の教義でもって理性に訴えるのではないことを強調したがる。謳い手は、煙草を擬人化して煙草に語りかける。その際の「人懐こいそなたの方が」("in lowlier way") という表現は、みすばらしく、謙遜して、質素なといった表現から、厳格で階層が細分化した壮麗なユダヤ・キリスト教世界と、煙草に代表される先住民世界と対比させていることは明瞭となる。<sup>4</sup> 「いらいらしてばかりのアダムの子孫たち」("The bristling clans of Adam sway") と、ユダヤ・キリスト教が人々を救いきれていないと述べていることになる。キリストというよりは教会のあり方に対する批判ともとれなくもないが、その厳格さを詩は理性批判として表している。"code or

creed" と、宗教上の信条、教義、掟、規範、規約、法、を規律といった厳格なイメージをユダヤ・キリスト教に付与している。

「アダムの子孫たち」は "clans" と表されていたが、"clan" には「氏族」の意味合いもあり、同連の「部族ごとの旗 ("tribal flags") など投げ捨てりゃ」という詩行と関連しよう。一部族のなかに複数の氏族がある。つまり、clan や tribe を使うことから、元来は同じものなのだから、いがみ合いはよさうというメッセージが読み取れる。この言い回しに、メルヴィルのあらゆる人種がひとつの同じ神から生まれたとする宗教観を想起することも可能であろう。

上記引用最後の行のように、煙草が「炉辺」 ("hearthstone") となってくれるという表現もまた、文化横断的である。"hearthstone" には、「炉辺」の他にも、炉石、家庭、灰受け石、軽石、底石といった意味がある。すなわち、西洋の家庭ではマントルピースが家の中心にあり、家族の団欒の象徴といえる。先住民は文字通りの炉石は持たない。(先住民は主として狩猟文化であるため、季節ごとに移動を繰り返すことも多く、薪を起こした場所が食事や団欒の中心となる。) よって、先住民のパイプが、わざわざ文化横断的に西洋風の炉石となってくれようといっているのであり、この個所は、煙草の異文化に対する気前のよさを表す。批評家 Timothy Marr も、「聖なる煙草」の煙草が炉辺となってくれるというくだりを、人類、同じ神から生まれたという文脈でこういう。"For example, in his poem 'Herba Santa,' the sociality of shared smoking gathers the 'bristling clans of Adam' around 'one hearthstone of the world.'" (Marr 139-40)

### 第三セクション

草刈鎌、王権、筆、石炭入れのためー

そうとも、だめ労働者のために。

使いすぎの頭、よたつく足のため、



<神の休戦>の慰めで

<カルメット>参上ってわけ！

(326)

ここでは、煙草があらゆる社会階層—頭脳労働や肉体労働者を含む、農民、王、表現者、工場労働者—に役立つといっている。頭脳労働が描かれていることから押して、この連で描かれているのは西洋人であると考えてよい。また、<神の休戦>というのは、安息日には一時的に諍いを忘れるべしというカトリック教における概念である。もちろん、<神の休戦>といっても一時休戦という限定的なものにすぎないが、それでも、煙草の登場で平和がもたらされる。

それよりも、このセクションでは、最終行のカルメットという言葉が、この詩を先住民と関連させるのに決定的である。

#### 第四セクション

ああ、ラーリーが見つかるまでは

温かく抱<sup>いだ</sup>いてくれる、そなたなる慰めを知らなかった世のために  
そなたはギリアデ（パレスチナ）には癒せないことも癒してくれる  
えもいえぬ心地よさで癒してくれる。

そなたは神経に入り込み

魂に風を入れ、  
かこつ気持ちの御仁にも、罪におののく御仁にも  
<教会>がすべきことを果たすのに一役買う。

襷飾りをつけてしゃちこばっというとも、

<金>さえあれば心配事も消える雑用係さん。

(9)

そんな人でもちょっとした満足感を取り戻せるまで  
そなたは、ねんごろに慰めてくれる。

悪党だってそなたには、いちころさ  
心が小春日和に寛いで、  
福音が最後の訴えをしてるって分かるから、  
信条にとらわれていなかった最初の福音のときみたいに、  
人よ人、穏やかであれ一親切であれ！  
(326)

ひとつ前の第三セクションの最後でカルメットが作品に出てきたこともあざかり、この第四セクションでは作品が佳境に入る感がある。しかもセクション数も詩行も他セクションより多い。

まずその第一連ではラーリー、つまり北米ヴァージニアでの煙草で財をなしたイギリスのウォルター・ラーリー卿 (Sir Walter Raleigh) が登場する。<sup>5</sup>イギリスは16世紀後半に新大陸に進出し、ラーリーらがパイプ喫煙を持ち帰った。パイプをくゆらすのが、紳士の条件とされるようになり、タバコはヨーロッパ中に広がっていった。ラーリーが北米に行くまで、西洋は煙草を知らなかった。つまり、西洋文明人が先住民に福音をもたらしたのではなく、その逆だと主張しているわけである。(ラーリーとの関連で付け加えれば、「聖なる煙草」と同じく『ティモレオン』に所収された「多島海」("The Archipelago") という詩でもラーリーは否定的に用いられている。<sup>6</sup>

同じく第一連の、「そなたはギリアデ (パレスチナ) が癒せなかったものを癒す」("That helps when Gilead's fails to heal") というくだりは、ユダヤ・キリスト教が癒すことができなくなったものを煙草が癒す、つまり煙草が西洋に勝ると主張している。第二連になると、煙草が「<教会>が授けられぬ効能をもた

らしてくれる」（"The Church's aim thou dost subserve"）と断じるのだから、反西洋的な主張は一層、はっきりとしてくる。ほのめかされているのは、ユダヤ・キリスト教には、原罪を唱え、罪意識に慄く者たちを救えなかった一方、そうした排他性は煙草にはないということである。

続く第三連も、そうした主張を継承している。煙草の救いの手ならぬ救いの煙は、凡庸な小市民から守銭奴に至るまで、さまざまな者に差し伸ばされている。また、メルヴィルは「<金>」を "Money" とはせず "Gold" としているので、南北アメリカへのコロンブスやコルテスによる征服史を背景としているというようにも読めよう。

第四連、つまり本セクションの最終連では、先述の「小春日和」（"In autumn's Indian air"）が、今度は "St. Martin's summer" という表現をとっている。冬将軍が襲い来る直前という切迫感があり、さすがの「悪党」も観念して、最後のチャンスとばかりに煙草の癒しに心身を委ねるというわけである。その様子を諷く手は、あさましいというようには描いていない。

聖マルタンのありさまは、本詩「聖なる煙草」のキリスト的和平のメッセージとも合致する。この聖人はかつては武人であったが、キリストに出会い、キャリアを投げ打ったのもあった。<sup>7</sup>

繰り返すが、メルヴィルは何もキリスト教の唱える福音を全面否定しているのではなく、教会制度のあり方を批判しているだけである。彼は最初の福音、つまりキリストが命を賭して唱えたものは、「信条なんかにとらわれなかった」（"apart from creed"）と考え、福音そのものはむしろ理想としている。メルヴィルは福音を重視するからこそ、教会が本来のキリストの教えから乖離していることを残念がっているのである。

本セクションの最終行「心よ心、穏やかであれ—親切であれ！」（"Be peaceful, man—be kind!"）はトーンを変え、何ともシンプルな英語で語られ、直接、標語のように読者に届く。

第五セクション

その昔、一層高い平原で禁じられたはずだが、  
ああ、至高の〈愛〉よ、また訪<sup>おと</sup>なってくれたのかい  
本当にそなたかい。

戻り来たりて、われらも魅するか  
雑草みたいななりしてさ  
神として徒労に訴え  
人として更に無駄な血を流したがゆえに

(326)

前述の第二セクション第二連の "in lowlier way" という、みすぼらしく、謙遜して、質素なといった表現は、この連の「雑草みたいななりしてさ」("In likeness of a weed") と呼応しよう。(メルヴィルは *Weeds and Wildings* と表題をつけた詩集を遺稿として残していた。"wilding" は「野生の」という意味であるが、"weed" には「雑草、役に立たないもの」といった否定的な意味がある。) 第二セクション第二連の「人懐こいそなたの方が」("in lowlier way") という、みすぼらしく、謙遜して、質素なといった表現から、厳格で壮麗なユダヤ・キリスト教世界と煙草に代表される先住民世界との対比が鮮やかである。

一見しただけでは、このセクションのメッセージは、本詩で述べてきたことの繰り返し、あるいは単なる総括という感があるが、とんでもない。神が、このセクションでは "a god" と小文字になっていて、先述の〈神の休戦〉などのような大文字の、つまりユダヤ・キリスト教の神ではない。また、不定冠詞 a が付いている限りは、この神にしても、神々のひとつにすぎず、唯一絶対神ではない。詩は多元文化主義の前提に立ち、「カルメットの神」といってよい小文字の神をこうさりげなく示しているのであろう。それはユダヤ・キリスト教の神を超えるものとして提示され、古代ディオニュソスを奉る異教や仏教あたり

とも重なる神である。"That as a god dist vainly woo,/ As man more vainly bleed?" というのだから、その小文字の取るに足らない神（西洋では、異教の、力のない神）が、大文字の、ユダヤ・キリスト教の神に勝るという。これはメルヴィル一流の激烈な転覆といわざるをえない。この小文字の神が掲げる福音は内容的にはキリスト教と非常に似たものである。ただ、より徹底させた、純粹な「至高の<愛>」（"Love supreme"）と読むべきであろう。

先のくんだり「その昔、一層高い平原で禁じられたはずだが、/ああ、至高の<愛>、また訪<sup>おと</sup>なってくれたのかい」は難解である。白人は、とくに19世紀後半になり、北米先住民の滅びがいよいよもって決定的になってくると、なりふりかまわず先住民の伝統文化を根こぎにしようとして、立て続けに禁止令を出した。ゴーストダンス、ポトラッチ、サンダンス、ペヨーテ、パウワウ、ドラムも禁じられたが、カルメットもであった。<sup>8</sup>

こう指摘した批評家はいないが、「聖なる煙草」のこのくんだりで詠われている神は、北米先住民のカルメットの神でもあろう。「その昔、一層高い平原で禁じられたが/舞い戻って魅了する」（"Rejected once on higher plain,/ O Love supreme, to come again/ Can this be thine?"）というくだりは、キリスト教の文脈でも読めるが、同時に先住民の文脈でも読める。とくに、スー族（ダコタ族）の聖地ブラックヒルズ（Black Hills）の文脈でも読めるのである。ブラックヒルズは、現在のサウスダコタ州の西部からワイオミング州にかかるあたりにある山々である。大平原が盛り上がったあたりで、スー族の部族国家では聖なる中心であった。聖なる煙草の儀式は、大霊ともいわれるグレイトスピリットとスー族の仲介となり、スー族が創造物のすべてとつながるのに必須の儀式であった（Holy）。下の説明にもあるように、このブラックヒルズは、そこで金鉱が発見される1870年代までは、白人の侵入を受けずに聖地としての静寂を保っていた。

It is not difficult to understand what made the Black Hills stand out as a locus of sacred power. The site of an ancient geological upheaval that pushed the rocky strata far above the surrounding semiarid plains, the Black Hills were, before the gold rush of the 1870s, a place of tranquil beauty. The peaks of this landform trapped the clouds that elsewhere swept across the plains, giving the regions its own climate and encouraging a dense vegetation that gave the hills, from a distance, their dark appearance and their name. In summer, the hills were a preferred site of spiritual observance: *pipe ceremonies*, sweat lodge ceremonies, Sun Dances [...]. (Niezen 152; 強調筆者)

同様のキリスト教と北米先住民の宗教との両義性は、本詩「聖なる煙草」で謳われている神が、かつてより高い平原で拒絶されたが、「人として更に無駄な血を流したがゆえに」("man more vainly bleed") この度、戻り来た、という詩行にも照応するのではないだろうか。キリスト教の文脈では、神の息子キリストの血を流した磔刑として読めるくだけだが、同時にまた北米先住民の文脈では、1890年のウーンデッド・ニーの虐殺と読める。先住民の女性や子供を含めて約300人の先住民が騎兵隊に虐殺されたものであり、この虐殺は象徴的に「これまで3世紀にわたって繰り広げられたインディアン戦争の終わりを象徴する事件だった」(ジャカン123)。ウーンデッド・ニーの虐殺は『ティモレオン』出版の4ヶ月前に起こっている。ここではまた、その虐殺の契機となったゴーストダンスが、キリスト再来を願っての先住民の踊りであったことを想起すべきである(Niezen 130-36)。

この詩行はキリスト教と切り結ぶ。19世紀末には、パイプがキリスト教と重なる部分もあるということだ。先住民の文脈でみれば、先住民の消滅とともにパイプ文化が消滅してしまう可能性の示唆とも読める。

よって、「聖なる煙草」の前半では西洋と東洋が二項対立的に提示されていたのが、ここにきてカルメットをキリスト教に仕えさせ、メシア運動でもあったゴーストダンスによって、両者を融合させたともいえる。元来メルヴィルは宗教に関連するくだりでは、表現をややこしくすることが多い。

批評家 Walker Cowen は、早い段階からメルヴィルの詩の重要性を訴え、詳細な注釈と付けたメルヴィルの詩を編纂した。しかし Cowen は、この第五セクションを「聖なる煙草」のクライマックスとみなすが、本セクションを次のように、あくまでもキリスト教の文脈で読んでいる。

Reference to the Indians' ceremonial use of tobacco ("Indian air," "tribal," "Calumet," "Pipe of Peace") contribute unity and meaning. (Cowen 241)

[I]n section V [of "Herba Santa"], the climax of the poem, where Melville associates the transcendent idea which tobacco represents with "Love supreme" or Christ, who, though rejected "as a god" and "As man," may yet "come...In likeness of a weed." The identification with Christ is prepared for in section II, where the communion supper ordained by "Love" leads to "strange new feuds," and is sustained throughout the poem by other religious references. (Cowen 241-42)

以上のように、第五セクションではスー族の歴史がキリスト磔刑と二重写しになっている。この箇所が言及する神性がキリストと重なっているにしても、同じ比重の二重写しではありえない。見てきたように、この詩は、キリスト教よりも先住民と関連のある聖なるパイプによる癒しを念頭に置いている。というよりも、19世紀末の先住民は伝統の宗教というかたちからは大きく様変わりをさせられ、キリスト教との混交を信じることによってしか存続できなかった。

たとえば当時、諸部族の間で急速な広がりを見せていたゴーストダンス教は、白人を恐怖させ、ウーンデッド・ニーの虐殺を招いたが、ゴーストダンス教ですらキリストの再臨を唱えた。キリスト教の宣教活動によりキリスト教と先住民の宗教とが伝統派の先住民にとってすら習合された、そういう時代であったのだ。

むろん、メルヴィルにとって生涯、キリスト教の重要性は否定すべくもない。同じく晩年の詩にも先の「シェリー幻視」（本稿の注2参照）の聖人への言及のみならず、諸作品においてキリスト教への言及は多い。しかし、「聖なる煙草」という詩にキリストを重ねるだけであれば、先住民のカルメットを中心に詠ってきた本作品をキリスト教世界に回収（収奪）することになってしまう。それを西洋キリスト教に回収してしまったのでは、異文化を占有する読みとなってしまう。そのような植民地主義的なといってよい認識体系こそ、この詩が、あるいはメルヴィルが作家生涯をかけて避けようと努めたことではなかつたらうか。

#### 第六セクション

忍べよ忍べ、わが魂！汝の＜東洋の＞小部屋にて

長き解放もたらしてくれる夢を習熟しろ。

不思議な琥珀色した甘きジャスミン茶を飲み

無抵抗の＜和平パイプ＞で＜聖なる煙草＞を深々と。

(327)

この最終セクションになると、東洋と西洋の攻防は、東洋が強くなって終わる。つまり本詩「聖なる煙草」では、先住民との関連の方が大きい。「耐え忍べ、わが魂！」（"Forbear, my soul!"）で始まるこの最終セクションでは、「汝」と語りかけていた対象は、聖なる煙草から自分自身に移っている。よって、最



終セクションは作品全体のなかでも特異なセクションである。文脈から推して、謳い手は世の中から孤立し、西洋世界に馴染めず苦しんでいるらしい。何とかわが身を鼓舞して未来永劫の救済を希求しており、そのために西洋に対峙するものとして東洋的なものにすがって生き延びようとしている。そして、救済のためであれば「習熟」("rehearse")する努力を厭うつもりはないという。とはいっても、ただ好きな煙草を喫むだけであるが。

謳い手は自らの魂のなかに「東洋の小部屋」("Eastern chamber")を持つ。この「汝の東洋の小部屋」には、西洋に抗するものとしての東洋があるらしい。むろん、地理的にはアメリカ大陸に暮してはいても、モンゴロイドの血をもつ先住民は、本詩の文脈では「東洋」の範疇に入るはずである。それは小部屋というかぎりは、西洋のスペースのなかにある限られた空間ではあるが、そこで謳い手は「甘い琥珀のジャスミン茶」("jasmine sweet and talismanic amber")を飲み、好戦的ではない「無抵抗の<和平パイプ>で憩う」("Inhaling Herba Santa in the passive Pipe of Peace")。"talismanic"には「護符の、魔よけの、魔力のある」といった意味がある。なお、William B. Dillinghamは、この「東洋の部屋」は涅槃を暗示すると主張しているが(Dillingham 120)、そうした忘我の境地を語り手が希求している様子は皆無である。小部屋というかぎりはささやかな部屋であろうが、謳い手にとってみればかけがえのない癒しの場であるようなのだ。第四セクション第四連の「小春日和」と呼応している。そこには「福音」があることと呼応するのである。

## 結び

本稿では、オリーブやパレスチナといった西洋やキリスト教に代表されるものが癒せなかった草草が、先住民の和平パイプで癒されるという主張、そこに示された多元文化的視点の独創性について述べてきた。「聖なる煙草」はキリスト教世界や近代世界を先住民の叡智が癒すことができるとして、軍配を先住民

にあげている点、19世紀も終わろうとするアメリカにあって特異といえよう。ましてやウーンデッド・ニーの虐殺の数ヵ月後に出された詩集に収められているのである。この詩を書きながら、メルヴィルはキリスト教と先住民の文化を混交させる夢を何度も唱えつつ、紫煙をくゆらせていたのではないかととれる。

考えてもみれば、異種混交はメルヴィルの芸術の主題でもあったことは、芸術論でもある、同じく『ティモレオン』所収の詩「芸術」("Art")に伺える。その源泉として、メルヴィルの若き体験ならびに南海を舞台とした初期作品などに遡及する必要もあるが、それについては稿を改めたい。

## 注

1. Hershel Parker の近著は、これからのメルヴィルの詩の研究の動向に影響するだろう。Parker は、1857年あるいは翌年から彼が亡くなる1891年に至るまで、メルヴィルは詩を書いていたこと、しかも詩はメルヴィルにとって余技などではなかったことを強調している。Parker は、完成原稿を仕上げながらも出版社が見つからなかったためにメルヴィルが1860年に詩集出版を果たせなかっただけであって、『戦争詩集』(*Battle Pieces*, 1866) が彼の第一詩集ではないことを批評家が無視してきたことを糾弾している。
2. 最晩年のメルヴィルの矜持を表すと思われる詩に「聖なる煙草」同様、『ティモレオン』所収の「シェリー幻視」("Shelley's Vision")がある。短詩なので訳を下に記す。

### シェリー幻視

沈鬱なとき

朝の<sup>みぎわ</sup>汗を果てなく<sup>さまよ</sup>彷徨った—

石もて我追う検閲憎み—

落胆し、影の移ろうを眺むるのみ。

苦々しく、小妖精のごとき気まぐれから

我も、石もて撃たれる者を撃った。  
我が投ずる影を。

すると、ご覧あれ、陽に映えしかの地面に  
ファントムの慄き現る  
そは、冠頂く聖スティーブンのごとし。  
さすれば、我魂に尊厳生まる。

(Melville 323)

このように、この詩は、繰言のように溜息のように、ひそやかに始まる。一読しただけでは、メルヴィルの悲惨な自らの老境を歌ったものようではあるが、少し注意をして読むと、強い詩である。メルヴィルはアメリカ批判を重ねてきた。第一作『タイプイー』(Typee)以来、本人が誇った『白鯨』(Moby-Dick)や『ピエール』(Pierre)を含め、自己や出版社、親族による検閲を気にして書いたが、本詩ではそうした年月を振り返っているかのようである。聖スティーブンは、ユダヤ人には不快な事を多く口にして、愚衆の激怒を誘発した。そして投石され、エルサレムで殉教した。メルヴィルはこの聖人に自らを重ねているわけで、読みようによっては、いい気なナルシズムの歌、あるいは不遜な詩と聞こえるかもしれない。が、第二連では、詩の謳い手は、ともすれば自己嫌悪に苛まれ、自己処罰の衝動にすら駆られる。ただし、自らに投石するのが、いたずらな小妖精の気まぐれでといった表現には、そこはかとなく余裕が漂い、わずかながらに生じる尊厳にしがみつこうように生きるといった悲惨さとは異なる。暗い色調の中にも、生き延びる術を体得した者の余裕すら感じさせる。これは詩集のタイトルの詩「ティモレオン」と併せて読みたい。いずれも寂しくも、凜として美しい。

3. ワインは勿論、キリスト教とも西洋とも関連し、方や先住民とは関係がない。白人は、最初は交易のために、そして先住民を壊滅させるためにと、さまざまな理由からアルコールを先住民にもたらした。ただその際は、ラム酒（稀にウイスキー）が主であって、ワインというのは、まずない。
4. 同じく『ティモレオン』所収のメルヴィルの詩作品「ミラノ大聖堂」("Milan Cathedral")にもキリスト教会の細分化された階層批判が見られる。この詩では、ミラノの白の大聖堂を「奇跡めく<芸術>の粹なり」と賞賛する。しかし詩は、「され

ど大理石の群れなす天使たちも/格付けあからさまなり。/教会制度は、なぜにかくも細かき階層を要するや。」という詩行で結ばれる (Melville 329-30)。本詩の解釈としては、人民の基本的な精神的必要から乖離したキリスト教会のありかたへの批判、戯画を読んでいる William Bysshe Stein が正しいと思われる。(Stein 118)

5. タバコは、1612年にジョン・ロルフが商業用の煙草の栽培を開始して7年で、早くもヴァージニア植民地最大の輸出品となり、1800年代まで収益性が高かった。奴隷を使って生産性を伸ばした。また、アメリカという国家が当初の経済発展をタバコに負うたことはつとに知られている通りである。「アメリカ経済の最初の基礎は、メリーランドも含むチェサピーク湾植民地が作り輸出したタバコによって築かれたのであった。その後の発展も、タバコを抜きにしては語れない。」(上野 vi) よって、本詩「聖なる煙草」は、ウォルター・ラーリーを持ち出すことで、北米における白人と先住民についての主題も深めている。
6. 「多島海」という詩作品で、メルヴィルは「島々が空っぽだったことなど、まずなかった/テーセウスがラーリーのような奴を漂流させしその昔には、/各島が素敵なヴァージニアだったが—/魂は奪われていなかった。」(Melville 335) と謳っている。テーセウスはギリシア神話に出てくる岩を持ち上げた英雄である。ラーリーがヴァージニアの先住民の魂を奪い、先住民の文化を破壊したのみか、先住民を絶滅させたことを間接的に述べていると筆者は解釈をする。
7. マルタンは316年ハンガリーのサバリアで生まれ、北イタリアのパヴィアで育った。父親は皇帝騎兵隊の騎士隊長を務めており、マルタンも15歳の時に皇帝騎兵隊に入隊。そしてフランスのアミアンに派遣されて任務に励んでいたところ、18歳の時にキリスト体験をする。マルタンは街頭で寒さに凍える浮浪者を見て、着ていた服を刀で二つに切り、浮浪者にその半分を掛けた。すると、その夜、夢の中に天使に囲まれたキリストが現れ、夕方彼が浮浪者に与えた半分の服を着ていた。マルタンはこれを機に洗礼を受け、キリストの教えに従い、戦うことはできないと告げる。すると隊長は彼を最前線に送り出すが、そこでマルタンは武器を投げ捨て、十字架を掲げて静かに敵に向かって歩いて行った。敵は、皆、武器を捨ててマルタンの前に平伏したという。
8. ポトラッチ禁止令は1884-85年に出た。アメリカ連邦政府は、スー族と1868年に締結したララミー砦の条約第2条では、ブラックヒルズがスー族の居留地の土地であると明言している (Niezen 153)。パイプへの言及こそないが、スー族にとってのブラッ

クヒルズでの儀式の大切さは Brown, 114, 274, 289 を参照。

## 引用文献

- Axtell, James. *Natives and Newcomers: The Cultural Origins of North America*. New York and London: Oxford University Press, 2001, 27.
- Brown, Dee. *Bury My Heart at Wounded Knee: An Indian History of the American West*. NY: Owl Book, 1970.
- Cowen, Walker. *Melville's Marginalia*, 2 vols. NY and London: Garland Publishing, Inc., 1987.
- Dillingham, William B. *Melville and His Circle: The Last Years*. Athens: University of George Press, 1996.
- Dryden, Edgar A. *Monumental Melville: The Formation of a Literary Career*. Stanford, CA: Stanford University Press, 2004.
- Hall, Robert L. "Cahokia Identity and Interaction Models of Cahokia Mississippian," Thomas E. Emerson and R. Barry Lewis eds. *Cahokia and the Hinterlands* Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1991, 3-34.
- Holy, Alexandra Witkin-New. "Black Elk and the Spiritual Significance of *Paha Sapa* (the Black Hills)," Clyde Holler ed. *The Black Elk Reader*, Syracuse, NY: Syracuse University Press, 2000, 188-205.
- Kelly, John E. "Cahokia and Its Role as a Gateway Center in Interregional Exchange," Thomas E. Emerson and R. Barry Lewis eds. *Cahokia and the Hinterlands*, Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1991, 61-81.
- Kring, Walter Donald. *Herman Melville's Religious Journey*. Ralleigh, NC.: Pentland Press, Inc., 1997.
- Marr, Timothy. "Without the Pale: Melville and Ethnic Cosmopolitanism," Gunn, Giles ed. *A Historical Guide to Herman Melville*, New York: Oxford University Press, 2005.
- Melville, Herman. Douglas Robillard (ed.) *The Poems of Herman Melville*. Kent, Ohio: The Kent State University Press, 2000.
- Niezen, Ronald. *Spirit Wars: Native North American Religions in the Age of Nation*

- Building*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 2000.
- Parker, Hershel. *Melville: The Making of the Poet*. Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 2008.
- Renker, Elizabeth. "Melville the Realist Poet", Wyn Kelley ed. *A Companion to Herman Melville*. Malden, MA: Blackwell, 2006, 482-96.
- Shurr, William H. *The Mystery of Iniquity: Melville as Poet, 1857-1891*. Lexington: The University Press of Kentucky, 1972.
- Stein, William Bysshe. *The Poetry of Melville's Late Years: Time, History, Myth, and Religion*. NY: State University of New York Press, 1970.
- Thompson, Lawrence. *Melville's Quarrel with God*. Princeton: Princeton University Press, 1952.
- 上野堅實『タバコの歴史』、大修館書店、1998年
- J・グッドマン『タバコの世界史』平凡社、1996年
- ロバート・L・ゲイル『ハーマン・メルヴィル事典』、雄松堂、2008年
- ジャカン、フィリップ『アメリカ・インディアン—奪われた大地』創元社、1992年
- 寺田建比古『神の沈黙—ハーマン・メルヴィルの本質と作品』沖積舎、1968年